第 34 回アジア女性会議ー北九州

『危機の時代を生きる』

1 部／講演「環境へのアプローチ」

日時　2024 年 1 月 20 日（土）13：30-15：15
会場：オンライン視聴（Zoom）
　　会場視聴（北九州市立男女共同参画センター・ムーブ５階）
言語：日本語/英語（同時通訳）、手話、要約筆記

プログラム

ページ

＜開会式＞
13:30-13:45　p.1～2

■来賓挨拶　**武内 和久**　北九州市長
■主催者挨拶　**堀内 光子**（公財)アジア女性交流･研究フォーラム理事長

＜基調講演＞　p.3～9
13:45-14:15

■講師　**松下 和夫**　京都大学 名誉教授

＜ユーストーク･セッション＞　p.9～14
14:15-14:45

■パネリスト　**森 友里歌**
北九州市立大学大学院環境工学専攻建築デザインコース博士後期課程
NPO 北九州ビオトープネットワーク研究会
■パネリスト　**ハニィ・イスメイル（インドネシア）**
NPO/Nol Sampah Indonesia（ノルサンパ･インドネシア）の共同設立者

＜松下氏とユースによるラップアップ･セッション＞　p.14～17
14:45-15:05

開会式

進行：ただ今から第 34 回アジア女性会議を開催いたします。

今年のテーマは「危機の時代を生きる」。第 1 部と第 2 部の 2 部構成で実施いたします。

はじめに、北九州市長・武内和久（たけうち・かずひさ）様からお祝いメッセージのビデオが届いておりますのでご覧ください。

来賓挨拶	武内 和久　　北九州市長

武内：北九州市長の武内和久です。第 34 回を迎えましたアジア女性会議ー北九州の開催を心からお喜び申し上げます。

この会議は、1990 年のアジア女性交流・研究フォーラムの設立以来、フォーラムを代表する事業として毎年開催されてきました。会議を支えてこられましたアジア女性交流・研究フォーラムの堀内光子（ほりうち・みつこ）理事長をはじめ、関係の皆さまの熱意とご尽力に深く敬意を表したいと存じます。

今年のアジア女性会議のテーマは「危機の時代を生きる」であります。世界に目を向ければ、紛争などによる食糧やエネルギーの危機は深刻であり、日本におきましても大きな影響を受けているところです。

今回は、北九州市と連携して脱炭素化等の環境課題に取り組んでおられます公益財団法人 地球環境戦略研究機関（IGES：アイジェス）のシニアフェローであり、京都大学名誉教授であられる松下和夫（まつした・かずお）様にご講演いただくこととなっております。

その後、北九州市とインドネシア共和国スラバヤ市で市民活動を行っている環境活動団体ユースによるトークセッションが行われ、環境課題を通じて女性への課題の抽出やジェンダー分析について検討されると伺っております。

また、第 2 部ではウクライナ伝統楽器演奏と平和への語りのコンサートも開催され、身近な課題である環境や、かけがえのない平和について考える貴重な機会となっております。

本日のこの会議では、アジア女性交流・研究フォーラムの日本およびアジア地域のネットワークを通じ、ジェンダー平等実現に向けた活発な意見交換の場となることを期待しております。

北九州市では、男女共同参画啓発活動や女性活動の取り組みを推進してきた結果、市民の固定的性別役割分担意識が薄れる、また、女性の就業率が上昇するなどの成果が出ているところであります。

現在策定中の北九州市基本構想に基づき、さらに取り組みを進め、ジェンダー平等の実現につなげてまいります。

結びとなりますが、この会議が実り多きものとなりますよう、そして、ご出席の皆さまの今後ますますのご活躍・ご健勝を祈念いたしまして、私からのごあいさつとさせていただきます。本日のご盛会をお祈り申し上げます。

進行：続いて、主催者を代表して、アジア女性交流・研究フォーラム理事長の堀内光子がごあいさつ申し上げます。

主催者挨拶	堀内　光子　(公財)アジア女性交流・研究フォーラム理事長

堀内：皆さま、こんにちは。今日は私どもの会合においでいただきまして、ありがとうございます。

先ほど武内市長の話にもございましたが、今年のテーマは「危機の時代を生きる」ということで、気候変動と、平和の問題を皆さんと共に考える機会を提供いたします。

最初の「気候変動」の問題は、松下先生から基調講演としてお話しいただいた後、インドネシアからおいでいただいているユースと、地元で活躍されているユースの方にお話をいただくということになっております。松下先生、それから森友里歌さん、そしてインドネシアのスラバヤ市からはるばるおいでいただいたハニィ・イスメイルさんに最初にお礼を申し上げます。活発な議論になることを期待しております。

今回は 2 本立てのテーマで、最初は「気候変動」ですが、もう一つは「平和」ということで、地球上を考えますと、いろんな紛争が起こっている状況にあります。第 2 部は、ウクライナからおいでいただいているカテリーナさんの古典的な楽器演奏をお聴きいただき、平和について皆さんにも考えていただきたいと思います。

今日は、短い時間で重要なテーマが 2 つも入っており、皆さまのフォローも大変かと思いますが、今、私たちはどういう時代に生きているのか、そして、これから我々はどうしたらいいのかということを考える機会になればと思っております。

1 部の気候変動の問題で、ご専門家の松下先生は、幸福学会（日本 GNH 学会）の会長もしておられ、「幸福」という問題についてもお話をいただけます。大変な時代の中に、人々の幸せって何だろうと、皆さんが考える機会を提供できるものと思っております。

最後になりますが、今年の元旦の夜、能登半島のほうで大きな震災がございました。その震災に遭われました方々へのお見舞いを申し上げるとともに、能登で震災に遭われた皆さま方が一日も早く元の生活に戻れることを祈っております。

簡単ではございますが、私のごあいさつとさせていただきます。

進行：基調講演の松下和夫先生をお迎えしたいと思います。

松下和夫さまは、京都大学名誉教授、北九州市に立地する地球環境戦略研究機関（通称 IGES：アイジェス）のシニアフェロー、そして日本 GNH、これは国民総幸福量のことですが、日本 GNH 学会会長、環境庁、OECD 環境局、国連の環境開発会議地球サミット事務局勤務などをご歴任され、環境行政、特に地球環境政策、国際協力に長く関わり、研究を続けておられます。

今日は、環境首都を目指して取り組む私たち北九州市民に分かりやすく、「気候変動、さらに幸福を

通じて考える」と題して、30 分ほどお話しくださいます。松下先生、どうぞよろしくお願いいたします。

基調講演	松下 和夫　京都大学 名誉教授

松下：皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました松下でございます。本日は北九州市にお招きいただき、こうした機会をいただきたいへん光栄に存じております。

先ほどの武内市長、それから堀内理事長からもごあいさつがありましたように、私たちはまさに危機の時代に生きております。

元旦早々からの能登半島における震災、それから、続くウクライナおよびパレスチナでの戦争、そして、迫りくる気候危機、こういった時代を私たちは生きているわけであります。

こうした大変な時代の中で、平和と環境の問題、それからジェンダーとユースの関わり、そして、私たちがどう生きるか、幸福な世界をどうつくっていくか、といったことを考えていきたいと思います。

今日のお話は、最初に、いわゆる気候変動の問題、地球沸騰化、それから北九州の公害を振り返ること、環境と経済、地球の限界とドーナツ経済、それから、とりわけ若い人たちの声を聞き、ジェンダーの問題を考えていきます。そして最後に、幸福を考える一つの素材として、ブータンにおける幸福の問題を考えてみたいと思います。

去年はたいへん暑い一年でした。結果的には、観測史上最も暑い、あるいは人類史上最も暑い年だったとも言われています。産業革命の前と比べると、地球の平均気温が 1.48 度上昇しました。パリ協定という気候変動に関する条約で抑えようとしている 1.5 度以内というところに、もう到達しかかっております。

そういったことを受け、国連のアントニオ・グテーレス事務総長は警告を発しています。彼は、「地球温暖化の時代は終わりを告げ、地球沸騰化の時代が到来した」と言っています。

そして「これらは、科学者の予測や度重なる警告と完全に一致しており、唯一の驚きはその変化の速さであり、気候変動は始まりに過ぎない、恐ろしいことであります」と述べています。

去年は暑かったですが、おそらくさらに暑くなっていくということが考えられます。世界の気温上昇を 1.5 度に抑え、気候変動の最悪の事態を回避することは可能です。しかしそれは、劇的で早急な気候変動対策があってこそだと事務総長は警告しています。

気候変動は、単に温度が上がるとか海面が上昇することに加え、いわゆる「グローバルリスク」と言いますが、世界全体の水資源だとか、生態系だとか、海岸の沿岸だとか、そういった自然環境全体が侵されると同時に、農林業や国土、産業エネルギー、健康にも影響がおよび、最終的には経済への打撃が起こり、世界の安全への打撃も起こります。そして人間の生命にも影響が出るということで、まさにグローバルリスクと言われております。

去年はご記憶があると思いますが、色々な現象が世界で起こっております。欧州では熱波が起こり、カナダでは森林火災が起こり、その煙がニューヨークにまで届いています。さらに中国では北京で 41 度

を超え、アメリカでも森林火災が国中で起こっています。アフリカや中南米でも被害が起きております。

こうした状況の中で、国際的には、気候変動問題を議論する国際会議「気候変動枠組み条約」と言いますが、その第 28 回締約国会議(COP28)がアラブ首長国連邦(UAE)のドバイで開かれました。

ここで、いくつか新しい合意ができました。2030 年までに再生可能エネルギーを世界全体で 3 倍にすること、それからエネルギー効率の改善のスピードを従来の 2 倍にするという合意がなされました。

2 番目としてゼロカーボン、いわゆる低炭素燃料を活用したネットゼロ・エミッションですね、こうしたエネルギーシステムに変えていくことが合意されています。

それから 3 番目は、おそらく COP 史上初めてだと思いますが、「化石燃料」からの脱却を図るということが初めて出てきました。気候変動枠組み条約交渉を、30 年近くやっていますが、これまで化石燃料という言葉が使われたことはなかったです。

石油・石炭・天然ガスといった、CO^2 を出す化石燃料に依存する経済から脱却しようということが初めて合意され、2050 年までにネットゼロ(CO2 の排出を森林などによる吸収を差し引きゼロにする)を達成しようということが合意されました。

4 番目として、気候変動の影響を非常に受けている、いわゆる小島しょ(開発途上)国です。島国だとか、あるいは最貧国といった国では、彼らはほとんど CO^2 を出していないにも関わらず、影響をたくさん受けています。そうした国に対して、気候変動による損失と損害を補償する基金をつくるということが合意されております。

このように、ある意味では前に進んでいるわけですが、問題はそのスピードが十分かどうかということであります。

次に、北九州市の公害問題はすでに皆さん、ご存じの事が多いですが、私も環境省、環境庁の時代から関わっておりますが、この資料の写真はよくご覧になるかと思います。

左側がいわゆる公害が激しかった頃の北九州市で、右側は空気がきれいになり、天気が良い時の写真です(左右の写真は同じ場所からとったものです)。

日本の高度経済成長時代は、重化学工業化によって発展し、北九州市はその中心でした。煙がたくさん出て、当時は「七色の煙」として、 それが繁栄のシンボルというふうに考えられたわけですが、その結果、大変な健康被害や、海が汚染されるということが起こりました。

後でご紹介もあるかと思いますが、北九州市の皆さんは非常に真剣に取り組まれ、最終的にはかなり改善されました。国連環境計画の「グローバル 500」(注／国連環境計画が、持続可能な開発の基盤である環境の保護および改善に功績のあった個人および団体を表彰する制度)という表彰を受けるまでになっております。

そして、四日市も大気汚染がたいへん酷く、水俣ですとか、日本全国が高度経済成長時代に大変深刻な公害を経験したわけでございます。

こういった経験から、私たちは歴史から教訓を得ていく必要があると思います。いくつか教訓がありますが、一つは、問題が起きてから後で対策するよりは、あらかじめ予防して対策を取ったほうが結果的には被害を防げるし、経済的にも非常にコストが安いということです。これを「予防原則」と言います。

そうしたことをやるためには、あらかじめ様々なプロジェクトや事業がもたらす環境や社会に対する影響を、きちんと科学的に評価し、その環境、影響評価を実施することが必要です。

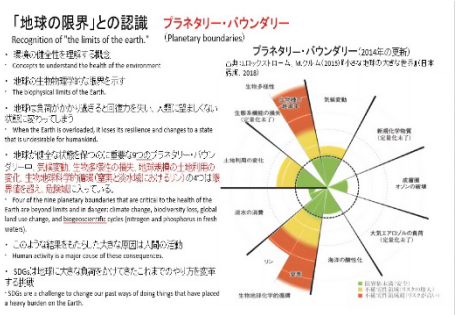
基本的には、汚染を起こした企業や、起こした人がしっかりと対策を取ること、これは「汚染者負担原則」（Polluter Pays Principle、PPP と略される）といい、汚染を出した人がこの始末をし、損害に対して補償することが大事です。

環境と経済は対立するというふうに考えられていますが、実際はあらかじめ環境対策をきちんと盛り込んだ経済政策をとり、環境と経済を統合して進めていくことが大事であるとの教訓を、我々は受けております。

一方で、日本はそうした高度経済成長時代の産業対策を、相当努力し、成果を上げてきたわけですが、もう少しグローバルに地球全体ということで捉えると、やはり世界の経済活動や人口が増え、いろんな化学物質を使い、化石燃料も使っていることから、地球全体がいわば環境の限界に達していると考えております。

「プラネタリー・バウンダリー」という言葉を使っておりますが、これは、スウェーデンの環境学者であるヨハン・ロックストロームさんなどが提唱している考え方で、環境の健全性を理解する概念です。指標を 9 つぐらい取り、地球の生物あるいは物理化学的な限界を示しています。

地球は、人間からするとたいへん大きい存在で、多少人間が悪いことをしても、それを吸収し、改善してくれる力があるわけですが、ただ、あまり過度に使ってしまうと、回復することができない状況になってしまいます。



そういうことを測る 9 つの指標を、ロックストロームさんは提唱しています。資料のこういうグラフで示していますが、気候変動や生物多様性、土地利用の変化というのは森林の減少などですね。それから、チッ素とリン酸の循環はすでに限界を超えております。

順次新しいデータを集めていますが、2023 年の最新のデータでは、9 つの指標のうち 6 つ、先ほど言いました 4 つに加え、水の消費や化学物質の使用は、すでにレッドゾーンに入ってしまっており、地球の環境は、非常に限界に近づいているということが科学的に示されています。

では、どうすればいいかということですが、一方で私たちは日々生活する上で、例えば教育をしっかりと提供したいとか、食糧を確保したいとか、人権を確保するとか、ジェンダー平等を達成するといった社会的に確保すべき条件があります。

「ソーシャル・バウンダリー」と言いますが、生態系の天井を超えずに、教育とか、食糧や安全というソーシャル・バウンダリーを確保しながら経済を営むということです。

プラネタリー・バウンダリーとソーシャル・バウンダリーを維持しながら、人間活動が地球の生態学的限界を超えず、人類が社会的基盤の下に落ちない、資料の緑の、ドーナツ型の領域で活動することが求められ、これはイギリスの経済学者であるケイト・ラワースさんが提

唱した考え方で、現在広く受け入れられております。

次はジェンダーの問題に移ります。この写真の方は、メアリー・ロビンソンさんといって、アイルランドの第 7 代大統領、初の女性の大統領ですが、彼女は国連の人権高等弁務官も歴任し、現在は国連の気候変動の特使です。

彼女は、「私たちは気候危機の深刻さを理解した最初の世代」であり、「気候危機に対して何かできる最後の世代なのである」と言っています。

いろいろ科学者が研究し、気候変動の状況を科学的に解明し、今後どういうことが起こるかを明らかにしています。そういったことを私たちは理解をしているわけですが、一方で、それに対するアクションを取れるのは私たちの世代なのです。次の世代に先送りすると、もう次の世代は大変ひどい状況になってしまうとも言っています。

一方で、気候変動問題は、人権問題であり、人権とジェンダー平等が気候変動問題の根幹だとも言っております。

人権問題というのは、例えば気候変動が食糧であったり、人々の健康であったり、水の問題であり、そういった経済がすべて関わっていて、気候変動がきちんと対処されないと、とりわけ貧しい国々や社会で底辺に置かれている人たち、あるいは女性たちが最初にご苦労されます。

気候変動の最大の被害者は、その主な原因を出した先進国ではなく、途上国や最貧国に暮らす人々、とりわけ女性たちですと彼女は言っております。

そういった意味で、日本の女性の社会的活動はどうかということで、一つの例ですが、企業の役員に占める女性の役割は、残念ながら日本は、先進国の中では、下から韓国に次いで低く、G7(先進 7 カ国)では一番下という状況です。

今年は COP29 で、気候変動の会議がアゼルバイジャンで開かれますが、アゼルバイジャンの COP29 の準備委員会は、すでに国内でできています。28 名の準備委員会のメンバーが指名されましたが、28 名全員が男性でした。これが非常に国際社会から批判され、アゼルバイジャンは急きょ 12 名の女性を委員に加えたということが最近報道されております。

それからやはり、私たちは若い人たちの声を聞かなくてはいけません。若い人はこれから何十年も生きていくわけで、気温が上がっている世界で生きていくのは若い人たちなのです。

資料の写真は、グレタ・トゥンベリさんで、スウェーデンの若き環境活動家ですね。彼女が 16 歳の時に国連で演説した内容を引用しております。「あなた方は、私たちの未来を奪っています。もし、私たち若者を裏切るなら、私たちはあなた方を絶対に許しません。たくさんの人が苦しみ、死にかかっています。生態系全体も崩壊しつつあります。あなた方は、お金のことや、経済成長が永遠に続くかのようなおとぎ話しかしていません。もう 30 年以上も、科学は明確に危機を伝えてきました。あなた方はそれを顧みようとせず、必要な解決策はいまだ見えてこないのに、自分たちはもう十分対応している、などと言うとは何と無神経なのでしょうか」と言っています。

たいへん厳しいことを言っているようですが、実は当たり前のことを言っています。科学が伝えていることに対して、現在の政治家、企業の経営者、社会のリーダー、あるいは大人たちがきちんと対応を取る

べきだということですね。

科学は非常に明確に、今後 CO^2 を減らし、温室効果ガスを減らさないと気温が上昇し、大変な事態が起こります。それに対してどういった対策がありますと明示しています。にもかかわらず社会の変革が進んでないのでちゃんと対策を取ってください、と彼女は言っております。私たちはそういった声にきちんと向かい、聞く必要があると思います。

最後のテーマですが、私は日本の総幸福学会という会に関わっておりますので、ブータンの幸福について、少し紹介をしたいと思います。

ブータンは非常に小さい国で、中国とインドのあいだに挟まれた、人口が現在 70～80 万人の小さい国ですが非常にユニークな取り組みをしています。前の国王の第 4 代、ジグミ・シンゲ・ワンチュク国王は、「GNH は GNP より重要」であり、「国民の幸福のほうが経済成長よりも大事だ」と言われました。

ワンチュク国王は、16 歳の時に前の国王が亡くなり急きょ王位を引き継ぎました。16 歳ですから、どうやって国を治めていくべきか、たいへん迷ったらしいですが、国中を回り、いろんな人の話を聞きました。

そして彼がたどり着いた結論は、人々はやはり最終的には、幸せを望んでいるということでした。もちろん幸せの定義は人によって違いますが、幸せを追求していくことが国の政治の在り方ではないか、と考えたのです。

幸せは、物質だけでは得られない。国民の幸せを考える時に必要なものは、最低限の物の豊かさは必要ですが、それに加え、国民個人の精神的な和と、家族の和、地域社会の和と、人間と大自然との調和であると考えました。

そして、国民一人一人がそれを自覚し、アイデンティティーとして共有できる歴史・文明・文化であることが大事であると、思い至ったのです。

国王の考えがきっかけですが、ブータンの偉いところは、それを憲法にしたり、あるいは法律で決めました。GNH 委員会というコミッションをつくり、国の政策を「幸福」という観点から評価しました。

おそらく世界の国の指導者は、国民の幸福は大事です、と誰もが言うと思います。ただ実際は、世界中の国のほとんどは、経済成長として、経済的に豊かになることを国家の目的や政策の目的としています。

経済成長は毎年、どれだけ増えました、GDP が増えました、賃金が増えました、自動車の生産が増えましたといったことに目的を置いているわけですが、ブータンは、それは目的ではないと断言しています。

経済成長は、国民が幸せを追求するための手段の一つなのです。成長の速度ではなく、人の和を大切にした経済成長の「質」が大事であると考えています。

そして、GNH の柱として「持続可能で公平な社会経済的発展」、「環境保全」、「文化と伝統の維持と振興」と「良いガバナンス」の 4 つを決めています。

資料の写真は現在の第 5 代国王ですが、彼は、GNH は優しさ、平等、思いやりという基本的な価値観と経済成長の追求の架け橋だと言っています。

経済成長を否定するのではなく、経済成長の過程には、優しさや平等や思いやりとかを考慮した成長が大事だということでしょうか。

4 つの主だった柱があると、先ほど言いましたことを少し詳しく説明します。

特徴的なことは、例えばブータンはまだ経済的には貧しい国ですが、医療費と教育費は無料化されて

います。

それから、森林保全の目標が国土の 6 割以上を森林として保つと明示され、実際には現在、国土の 7 割が森林です。

それから、世界最初の禁煙国家です。そして民族衣装とか伝統建築もつくり、民主的選挙、地方分権等を進めています。

この資料の図には、9 つの領域が示され、生態系の多様性とレジリエンス、良いガバナンスや時間の使い方、地域社会の活力、精神的健康、健康や文化の多様性、暮らしや教育がありますが、特徴的なのは、例えば国民にアンケートで、家族で一緒に食事をしていますか？とか、お祈りをしていますか？とか、お医者さんまでどれくらい時間がかかりますか？といった非常に分かりやすい指標で、国民の幸福度を調べています。そして、それらを政策に生かしているのです。

少し前の写真ですが、ブータンに行った時の写真をお見せします。

これは、2011 年の東日本大震災が起こった直後に、ブータンに呼ばれて行きました。ブータンは東日本大震災で最初に義援金を送ってくれた国で非常に親日的です。

これは子どもたちの写真で、幸福度の測り方はいろいろありますが、一つは子どもたちがどれだけハッピーかということですね。男の子たちですが、彼らは伝統的民族衣装を脱ぐと大体 T シャツを着ていて、こういう感じで仲良く暮らしています。

そしてこれはお姉ちゃんが妹を抱っこしています。昔は、日本でも大家族で、兄弟でこうして助け合う姿がありました。

それから、この写真は「みんなで建てる家」と書いていますが、ブータンでは木を切ることが非常に厳しく制限されていて、家を建てる時には木を切る許可を得て、地域の人が総出で家を建てるのです。一定の様式で、みんなで建てるのです。それがコミュニティーの連帯を高めていることになります。

以上、簡単にブータンの状況を紹介し、いろいろお話をしてきましたが、私たちはすでに地球の限界を、ある部分では超えてしまっています。そうした中で、石炭・石油・化石燃料の依存をやめて、転換する必要があります。

いわゆる「カーボンニュートラル」と言い、「ネットゼロ」とも言いますが、それを達成することは私たち自身に必要ですし、将来の世代に対しても責任を果たすことになります。

今日はあまり詳しく説明できませんでしたが、こうしたことを達成する資金もあれば技術もあるのです。再エネの技術あるいはコストは随分下がっています。実際に大胆に転換すればできるわけなのです。

ただし、時間はどんどん切迫しています。今直ちに舵を切らないと、気がついたときには、もう手遅れだということになってしまう恐れがあります。

一方で、脱炭素仕様とか省エネ仕様といったことだけではなく、私たちは将来、どういった社会を目指したいのか、どういうふうに人々が安心、安全でハッピーで、人間的な交流ができる社会をつくっていくか、あるいは平穏な社会をつくっていくビジョンを共につくっていく必要があるのではないかと思います。

しかし現在の日本社会、あるいは国際社会全体もですが、意思決定がいわゆる男社会、あるいは経済第一の世界の人たちが決めているという状況です。市民の声、女性の声、若者たちの声を意思決定に反映できる仕組みをつくっていく必要があると思います。

なかなか大変な時代ではありますが、一つの希望としては、確かに地球の資源は有限ですが、人々

の知恵や愛というとちょっとキザですが、人々に対する思いやりや、共感だとかコンパッションという利他的な心というのは、実は無限なのです。

アダム・スミスが経済社会を考えた時も、彼は自由競争だけを推奨したわけではなく、その背景にある人に対する思いやりや共感に裏付けされた経済を想定したのです。そういったコンパッションを持って進んでいくことです。

希望は、実際に行動することによって生まれます。現在は科学が進展しており、コンピューターによるシミュレーションで将来を予測できますが、望ましい将来を、予測するだけではなく、自らつくり、みんなで一緒につくる共創の未来としていくことが大事だと思います。

パーソナルコンピューターを発明したPCの父と言われるアラン・ケイという方がおり、彼は「未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ」と言っています。未来はこうありたいと予測するだけではなく、それをつくってしまうのです。こういう未来が必要だと発明したり、あるいは新しいシステムをつくったりということが必要ではないかと思います。

以上、ご参考までに私のご報告をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

進行：松下先生、ありがとうございました。先生はこの後のユーストークセッションにもご参加されます。

次のユーストークセッションでは、北九州市とインドネシア・スラバヤ市で環境に関する活動を行っているユースのお二人に登壇していただきます。

スラバヤ市と北九州市は環境姉妹都市で、今日は、現在も 30 度を超える猛暑が続くスラバヤ市からゲストをお迎えいたしました。

まずはユースの森友里歌さんです。現在、北九州市立大学大学院環境工学専攻建築デザインコース博士課程後期に所属されています。今日は NPO 北九州市ビオトープネットワーク研究会の立場でお話しくださいます。

つぎはハニィ・イスメイルさんでインドネシア・スラバヤ市にある NPO 法人、Nol Sampah（ノル サンパ）インドネシアの共同設立者です。

松下先生には最後のまとめのセッションまでお付き合いいただきます。それでは森さん、ハニィさん、よろしくお願いいたします。

パネリスト１	森 友里歌 北九州市立大学大学院環境工学専攻建築デザインコース博士後期課程 NPO 北九州ビオトープネットワーク研究会

森：初めまして、皆さま。北九州市立大学大学院環境工学専攻建築デザインコースに在籍しております、森友里歌と申します。本日はよろしくお願いいたします。

今日は私からは、北九州における NPO での市民活動の取り組みと、また、北九州市の姉妹都市でもあるスラバヤで市民活動されているハニィ・イスメイルさんと共同で、市民活動の取り組みについて発表さ

せていただきます。

私の実際の専門は、建築の意匠設計と呼ばれるものです。建築におけるデザインについて勉強しています。デザインといってもいろいろありますが、私はアメリカ人の現代建築家の方の研究をしています。音楽を聴いてそれを建築にする方で、建築のデザイン理論や、どうやってそういった形ができていくのかということを研究しています。

私自身、もう一つ個人的に考えているテーマがありまして、環境問題に対する危機というものを日頃から感じておりましたので、何か市民活動ができないかな、と思い、ご縁がありまして、NPO 北九州ビオトープネットワーク研究会に在籍し、北九州で環境問題に対するアクションを起こしています。

活動を拠点にしている北九州ですが、公害に侵されていた歴史があります。会場にいらっしゃる皆さまは、ほとんどが北九州市民の方だと思いますので、説明するのもおこがましい気もしますが、高度経済成長期での経済発展により、公害が発生しました。写真の通りで、60 年代には北九州の空と海は汚れ、生物が生息できないと言われていたほどでした。

こういったヒストリーを持つ北九州ですが、今は青い空と青い海が戻ってきています。それは、公害に対して子どもたちの健康と将来を不安に感じていた女性たちのアクションが初めだったと言われています。このアクションは「青空がほしい」といったムーブメントに変わり、女性たちは自発的な公害調査を行い、そういった積極的な活動を続けた女性たちの声を企業と行政は受け止め、連携した公害対策を行って、公害を克服してきました。

これはまさしく、女性のエンパワーメントが発揮された、素晴らしい歴史的な例だと私自身は分析しております。

世界中に、さまざまな公害問題や、環境問題はあるとは思いますが、1960 年代頃の日本において、今よりもっと男性社会だったのかなと、私は生まれておりませんので想像するしかできませんが、そういった中で、女性たちが自発的に行動し、またその声を無視しなかった、北九州市および北九州市にあった企業の真摯な取り組みがあったことが今の北九州市をつくっていますし、環境都市としてアピールし、今があるはその頃の女性たちの働きのおかげであると日々感動しています。

そんな北九州ですが、さまざまな市民活動が環境に対するアクションを起こしていますが、今日は私がおります、NPO 北九州ビオトープネットワーク研究会の取り組みを、簡単に説明させていただきます。

設立は 2001 年で、23 年目に差しかかるところです。この研究会では、北九州市を活動拠点に、地域の環境問題やまちづくりに取り組み、市民参加型のアクティビティを提案しています。

主な活動としては、北九州市では放置竹林が問題になっていますが、地域の竹林による生態系保全を守るために、毎月第 2 土曜日に、竹林保全活動を、主に若松区で行っています。

ほかにも、環境教育活動や、のちほど詳しく説明させていただきますが、ビールの主原料であるホップの栽培による SDGs 促進、栽培、醸造、販売までを第 6 次産業化した「響灘ホップの会」を立ち上げており、また国際活動としてはスラバヤにおけるマングローブ森林保全活動を行っております。

その関係で私も一度スラバヤに滞在し、そこでハニィ・イスメイルさんと交流する機会を頂いたことが、このコミュニティーのきっかけです。

では、ホップの栽培を通したまちづくりというものを今日はご紹介させていただきますが、「北九州響フレッシュホップス若松エール」を、この会場にいらっしゃる皆さんはご存じでしょうか。飲んだことがあるという

方はいますか。ありがとうございます、2 名ほどいらっしゃいました。

2019 年の 12 月にホップの栽培を通したまちづくりを行う機関として、「響灘ホップの会」を立ち上げました。

ホップの栽培がどうまちづくりにつながっているかといいますと、実はホップはグリーンカーテンとして利用することができる、つる性の植物なのです。

ホップの栽培をすることで、緑のカーテンを建物に作り、太陽からの熱負荷を削減するといった、環境に対する一つのアクションがここで生まれます。

ホップの栽培は、北九州市の主に若松エリアですが、学校や施設、地元農家さんに協力をいただき、栽培・収穫を行います。

収穫されたホップは、門司港レトロビールさんと協力し、醸造工程に入ります。まず、収穫されたホップは、このくらいの小さな緑のもので、それを割ると、ルプリン（注／ホップの毬花の中にある黄色い粒状の樹脂）というものが露出します。

そのルプリンを割って、ホップを釜へ投入し、その後いくつかの醸造のプロセスを踏んで、瓶詰め作業が行われて、出荷されていきます。

ビールは、ペールエールを毎年定番として作っていますが、原料にワサビを入れたり、ラガータイプを作ってみたりと、このビールプロジェクト自体、日が浅いので、さまざまなタイプにチャレンジして、どんどん面白いものを市民の皆様と協力して作っていきたいなと思い活動しています。

ホップを育てる過程、ビール醸造、販売、その他ホップを使った特産品の計画や、ユーザーの手元に渡るまでさまざまなプロセスを通じて、ホップの生産者である市民や、学校関係者、地元の門司港レトロビールさん、醸造会社さんや行政も関わっていますし、企業、市民、行政などが一体となり、ホップの栽培を通じてみんなで環境問題に対して何か取り組んでいくネットワークを構築しているのが、この取り組みの大きな特徴です。

こうした NPO の活動を、ジェンダーの視点から考えてみました。

まず、私の中の活動の参加数や環境意識やモチベーションは、ジェンダーの視点から見てみても男女の差というものはありません。特に男性だからこうだからとか、女性だからということはありません。

ただ活動の内容によっては、男性のフィジカルな強みであったり、女性同士のおしゃべりやコミュニティーの絆が深かったりする場面はあります。

コミュニティーを生かし、男性のフィジカルを生かすことが必要な企画や場面はあります。男女の差をうまくポジティブに生かし、活動を行っていく必要があると思います。

3 つ目は、運営を組織する立場としてみると、運営に携わるメンバーは、ほとんどが 50 代以上の男性です。運営側で活動している女性は、私一人です。

改めて分析してみると、組織における上層部のジェンダーバランスは、非常にアンバランスであることを感じました。先ほど松下先生の発表でもありましたが、女性が管理職やリーダーに就く割合は、日本はほかの国に比べて圧倒的に少ないという結果が現れています。

そういった組織やグループ内のジェンダーバランスをなぜ保つ必要があるのかと考えると、性別によって視点や役割が異なることがあります。やはり若い世代や、女性、高齢者、男性やそのジェネレーションによってみえる視点は異なってくると思います。

しかし危機的な状況において、女性や子どもは影響を受けやすい立場にあると思います。今も、震災で苦しんでいらっしゃる方がいると思いますが、同じ女性の立場として、女性にかかる問題はたくさんあるように感じます。

こうした危機的な状況下で決定権を持つ上層部が、非常に偏ったジェンダーや、年代のアンバランスにより、効果的な決断ができなくなるということが、不安視する問題であると思います。

私の答えとしては、多様な視点から効果的な提案や解決策を生み出すためにも、組織におけるジェンダーバランスをうまく取り入れたほうがいいですし、今後私が NPO 活動をする中で、ジェンダーバランスは、ぜひ考えるべき問題であると思います。

実際に自分はこんなふうにローカルに活動しているのに、日本の問題に直結していたということが、このジェンダー分析に関する驚きでありました。

私からは以上になりますが、インドネシアのハニィさんは、このシンポジウムのために来日され、北九州市で視察を行ってまいりましたので少しご報告します。

まず、私が在籍しております学研都市ひびきのにおける、エコキャンパスの取り組みを視察し、ほかにもアジアカーボンニュートラルセンターや松下先生がシニアフェローとして在籍していらっしゃいます IGES にも訪問させていただきまして、今後、スラバヤ市と北九州市の連携や取り組みを協議いたしました。

ほかに、インドネシアとゆかりのある株式会社西原商事ホールディングスを訪問し、ウェイス・トマネジメント(注／日々生み出される廃棄物の収集、処理、リサイクル、そして最終的な排出に至るまでのプロセスを全体的に管理すること)や、シャボン玉石けん株式会社も訪問させていただきました。

また響灘ビオトープでは、今日までですが、ハニィさんが撮影されたスラバヤでの環境活動の写真を展示する機会を頂きました。

次は、インドネシアにおける市民紹介についてご説明いたします。ハニィさん、よろしくお願いいたします。

パネリスト２　ハニィ・イスメイル（インドネシア）

NPO/Nol Sampah Indonesia（ノルサンパ・インドネシア）の共同設立者

ハニィ：北九州に来て、皆さんとお会いできて、たいへんうれしく思います。

私はハニィと申します。インドネシアから来ました。ノルサンパ・インドネシアの共同設立者の一人で、2009 年から NPO ノルサンパ インドネシアで活動しています。

インドネシアでは廃棄物の量が増え続け、ある時にごみの集積場が山となり、もう都市部ではなかなか埋立地が見つからなくなりました。そのため、ごみが何十メートルもの高さに積み上げられる問題が発生しました。

これは環境省からのデータですが、廃棄物処理に関しては、ルイガジャ埋立地で大きな問題が起こりました。ルイガジャ埋立地では、ごみが 20 メートルの高さに積み上がり、その山が崩れたために 137 軒の家が埋まり、143 人が死亡しました。

この日が、全国廃棄物の日と定められたのですが、のちにこれは廃棄物処理の深刻さを考える大きなきっかけとなりました。

このごみ問題を対処するために、ノルサンパ・インドネシアが立ち上げられました。市民参加のもとで環境に優しい環境管理をしようと考えました。私たちは参加型で、環境に優しい持続可能な管理システムをつくるパラダイムを追求し、コミュニティーの変革を目指しています。

ノルサンパ・インドネシアは、ミッションとビジョンを実現するために、いくつかのプログラムを実施しております。より環境に優しい、参加型環境管理コミュニティーの実現のためのプログラムです。いくつか取り組みをご紹介させていただきます。

まず、健康的な生活キャンペーンということで、人々に対し、より健康的なライフスタイルをおくるため、食事をとるよう促しています。家庭菜園をつくり、自給自足の生活を送ることで、ごみの削減に貢献しようというものです。

次は、使い捨てプラスチックを削減しようというビニール袋ダイエットキャンペーンを実施しています。いくつかの地域では、使い捨てプラスチックの使用に関する規制が設けられ、すでに 130 の自治体において、規制されています。

3 つ目のプログラムですが、家庭での廃棄物を管理しようというものです。例えば、高倉式システム（注／生ごみリサイクル技術として、また、画期的な廃棄物減量の手段として、世界的に認知されているコンポストで、2004 年スラバヤ市の廃棄物管理改善事業に採択された）など、なるべく家庭内で廃棄物を処理することを奨励しています。家庭内で処理することで、この埋立地に送られる廃棄物を減らそうというものです。

4 つ目のプログラムは、マングローブの再生です。スラバヤではたくさんのマングローブ林があります。保護区となっており、渡り鳥の中継地でもあります。ただ、川がゴミで汚染され、生活排水によって汚染が懸念されていますが、そこを保護再生しようという取り組みで、このプログラムは、北九州市や企業からご協力頂いております。

ごみも清掃しておりますが、マングローブを管理することで地元住民の経済や収入を増やすとことを目的として取り組んでまいりました。これまで 12 年間以上、地元のコミュニティーを巻き込んでおります。

5 つ目は、環境教育の提供と学校支援です。子どもたちを教室の外に連れ出し、子どもたちがこうした現状を肌で感じ、学んだことをすぐに実践できるような取り組みを行っています。

例えば子どもたちには、マングローブの植林や、海のごみの清掃活動に参加してもらっています。子どもの時からこういった教育を受けることにより、環境に対する行動が習慣化できると考えています。

さて、もう一つ「クライメートビレッジ」という気候村での取り組みをご紹介していきたいと思いますが、これは環境林業省が主催しているプログラムで、環境に配慮したライフスタイルを提案するプログラムで国の温室効果ガス削減目標に向けて、気候変動の影響に対する地元社会のレジリエンスを高めることができます。

環境を守るために、この気候村で行われてきた内容を一部ご紹介します。例えば、家庭で食べられる野菜を栽培する。これは経済的にも、地域にとっても効果的です。栽培にはコンポストや堆肥袋、バイオポリ、高倉システムなどを活用しています。廃棄物管理にフォーカスを当て、有機的な形で変換をさせています。

それ以外にも、雨水を貯留したり、ごみ銀行といったものもあります。これは、実際のごみの量なども記録します。雨水は、排水するのではなく貯留し、植物などに使います。それ以外にも、虫や液体肥料などを 21 日間かけて肥料化をしていきます。

さて活動における女性のエンパワーメントの観点ですが、支援は継続的でなければならないと考えています。一般的に、人の行動が変わるまでには 3 年かかると言われています。

2 点目は、コミュニティーの参加がないとプログラムの効果が出ませんので、非常に重要です。男女ともに積極的にコミュニティー参加をしていただいて、拡大していくことがとても重要です。

最後に廃棄物管理ですが、活動のほとんどは、女性が関係しています。一般的にわが国では、家事は女性が行っていますので、女性の声や活動が大きな変化をもたらす可能性が高いのです。

ご清聴ありがとうございました。

進行：森さん、ハニィさん、どうもありがとうございました。それでは、ここからはまとめのセッションです。

ラップアップ・セッション

松下：森さん、ハニィさん、どうも、たいへん素晴らしい報告、ありがとうございました。

私の報告の中で、女性と若い人の声を聞こうと述べましたが、まさにお二人は、女性としてあるいは若い世代として、実際に活動し、成果を上げているということがよく分かったと思います。

森さんは大学院での専門分野の研究に加えて、NPO として、放置された竹林の管理や環境教育、そしてホップの栽培を通じたまちづくり、あるいは企業とも連携して SDGs のネットワークをつくるといったたいへんユニークな活動をされています。

環境を、かけ声だけでなく、実際に企業とか市民とかコミュニティーと連携し、経済的にもサステナブルで、地域の特色を生かした活動をされていらっしゃいます。

ハニィさんについては、インドネシアで廃棄物の NPO を立ち上げられ、とりわけ参加型という点に注目します。市民やコミュニティーの参加を求めて、管理型の廃棄物処理を進めているゼロ・ウェイスト・プログラムですね。日本でもたいへん問題になっていますが、ビニール袋をターゲットにしたキャンペーンをやったり、家庭廃棄物管理までおこなっています。

それから、とりわけマングローブの植林、あるいはごみの清掃をやっておられるのですね。今日初めて知りましたが、北九州市や北九州市の企業が支援されているということで、たいへんこれも素晴らしいと思います。

マングローブを管理することによって、地元住民の経済や収入を増やす仕組みができたとありましたが、どういう仕組みで地元の人が経済的にメリットがあるのかを後で説明いただければと思います。

お二人は、たいへん素晴らしい実践活動をされているわけですが、お二人に対して私のほうから質問をさせていただきます。

1 つ目の質問は、NPO 活動、あるいは環境に関わる活動をすることはいろいろ難しいこともあるかと思いますが、これまでやってきて最大の困難はどういったものであったかという事です。

それから 2 つ目は、こうした活動に取り組んで良かった点、成果が上がった点があれば、ご紹介いただ

ければと思います。それでは森さんからお願いします。

森：これまでの活動での苦労は、今日説明させていただいたホップの活動ですね。

私自身は主にマネジメント業務に関わっておりましたが、地元の方の声を聞くと、ホップの栽培において、ホップというものは小さなもので、毎日の水やりや、特に収穫作業では、たくさん生っているものをもぎ取っていかなければならないので、肉体的な労働の協力が必要です。その声かけやコミュニティーと信頼関係を築いていくのは、非常に大きな苦労でした。先ほど松下先生も、経済的にもサステナブルであると評価していただきましたが、販売しておりますので、経済的採算もよく考えなければなりませんでした。

販売業績がよくない年がありましたが、やはり売れ残りをつくらないことを考えたりといった販売活動における苦しみも多少はあったと思います。

活動における喜びは、考えたものがどんどん作り上がっていって、一つのプロダクトとして市民、行政、企業とコラボレーションして作り上げていけることが一つの喜びであります。完成した際に試飲会などを開催しておりますが、今年もおいしいねとか、温かい声をいただければ「ああ、やったかいがあったな」と感じています。

松下：はい、ありがとうございました。それでは、ハニィさんからお答えをお願いします。

ハニィ：はい。マングローブで市民の経済をどうやって上げるかというのは、エビとか魚とかの養殖池があり、マングローブを栽培し、清掃してきれいになったら、池の状態が良くなり、更にマングローブがよく育ち、経済が上がっていきます。

そして苦労したことは、私たちは多くの障害を経験してきました。この活動が重要ではないと考えられていたので、社会やほかの機関に受け入れられませんでしたが、常に社交的に接して、コミュニティー活動を決して諦めずに行ってきました。

2 番目が再生です。レジリエンスを見つけることが難しいのです。継続するのが難しいのです。私たちの活動を続けるためには、レジリエーション（注／レジリエンス（回復力）とワーケーションを組み合わせた造語）が難しいという障害がありました。

もう一つの難しい点として、やはり資金の獲得です。企業や、CSR（企業の社会的責任、Corporate Social Responsibility）やいろいろな環境保護のプログラムを見つけてくるファンディングといった、活動のための資金を探してくることが大きな障害であり、難しい点です。

良かったことは、私たちが非常に満足していることです。時間をかけた活動の結果とともに、14 年間でこの環境活動を多くの機関、大学、コミュニティーや政府などとの協力とともに、一貫性を保つことができているからです。

松下：ありがとうございました。それぞれ、大変だったことや、喜びについて述べてもらいました。

お聞きして感じることは、いろいろな障害がありますが、非常に粘り強く継続して、協力者や地域コミュニティーと連携して新しい解決策を見出し、それが結果的に社会からも評価されることにつながっている、というふうに受け止めました。

次の質問ですが、次なるステップといいますか、現在の活動をより広げるためには、どういった取り組

みが必要であるかといった考えを述べてください。また、森さんからよろしいですか。

森：次なるステップというのは、私が最後に挙げましたように、女性がどうやってリーダーになっていくかという日本全体の問題でもあると思うのですが、現実的に私のNPOでは、そろそろ世代交代なのかなとも感じています。私自身がどうやって私の後に続く者を引っ張っていけるかもありますし、私が上のほうと、どうやって架け橋を渡していけるのかというのは今後の私自身の課題でもありますし、これは NPO として活動を続けていく中での問題だと感じています。

松下：はい、ありがとうございました。次はハニィさん、よろしいですか？

ハニィ：はい。次のステップとしては、これまで 14 年間活動してきましたが、最初はスラバヤ市だけで活動を続けてきましたが、活動が広がり、2021 年にはバリ島やロンボク島など、インドネシアの各地のコミュニティーや、政府、NGO、あるいは民間企業とのコラボレーションというのをどんどん実施しています。もともと最初のNPOの名前が「Nol Sampah（ノル サンパ）」、ごみゼロという意味ですが、ノル サンパ スラバヤだったのが、2021 年には大きな組織となり、「ノル サンパ インドネシア」と名前を変えて活動を拡大しています。

松下：ありがとうございました。セッション最後の質問となりますが、お二人に紙をお配りしますので、今日参加され、聞かれている方に対するメッセージやキーワードを簡潔に書いてもらいたいと思います。私も書きます。皆さまちょっとお待ちください。

松下：それでは、今度はハニィさんから紙を皆さんに見せてください。

ハニィ：（紙に書いたメッセージは）「女性が本当に偉い」です。世界は女性の手で変化できます。

松下：はい、それでは森さん、お願いいたします。

森：私は、皆さまと一緒に未来をつくる「Create Future（クリエイト・フューチャー）」です。このメッセージを今日は皆さまと共有したいと思います。

松下：はい、ありがとうございました。

最後に私ですが、森さんとかぶってしまうのですが、「3 つの C による望ましい未来の共創」としました。共創というのは、未来を共につくるということです。

3 つの C は、1 つがコミットメント、志です。それから 2 つ目がコンティニュエーション、継続です。3 つ目がコラボレーション、共同です。

なかなか環境の問題、ジェンダーの問題、平和の問題は難しい問題ですから、私たちが志を持つ必要があると思います。最初は、一人から始めることになるかもしれませんが、まず志を持って始めると。そ

して志を持って継続することがコンティニュエーションですね。

それから 3 番目として、継続していくと、いろいろ協力してくれる人が出てきます。提議してくれたり、協力してくれたりする人が出てきますので、そういった人と共同で進めていくという、コラボレーションです。

「志を持って、継続をして、共同しましょう」ということですね。これをメッセージとして、本日のセッションのまとめとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

進行：いくつか質問が来ていますので、ご紹介します。

最初は、松下先生のお話の中にありました「プラネタリー・バウンダリー」、「ソーシャル・バウンダリー」、「ネットゼロ・エミッション」について教えてほしい、という質問です。こちらは、本日お渡している資料の最後に松下先生の参考文献がございます。この本の中に、詳しく説明が書かれております。

続きましては、松下先生へのご質問です。気候変動の被害者が加害者である、という具体例を教えてくださいという事でした。何か分かりやすい例があれば教えてほしいということで、最貧国の人々が原因をつくり出さないためにどうしたらいいのか、ということも含めてのご質問です。松下先生、お願いします。

松下：一般的に、気候変動問題は全ての人が関わり、全ての人が被害を受けると思いますが、ただ、原因をつくっている程度は、人や国によってずいぶん差があります。

例えばアメリカや日本のように、一人あたりのエネルギー消費量や、あるいは CO^2 を出している量が多い国は大変です。アメリカ人 1 人とインド人 1 人が出している CO^2 を比べると、おそらく 10 倍程度アメリカ人のほうが出している、と言われています。

従って先進国と言われ、とりわけ浪費型の経済の国はたくさん CO^2 を出しています。一方で、小さい島国、小島しょ国といわれるツバルやバヌアツです。太平洋にある島国は、ほとんど CO^2 は出していないにも関わらず、海面上昇の影響を直接受けているという意味で、被害が非対象と言いますが、被害を受ける人と、あまり受けない人とのギャップが大きいのです。

同じ先進国でも、実は被害の受け方は違っています。日本は、先進国の中では被害を受けやすい国です。それは、台風が多く、大雨や洪水が多いからです。影響を受けやすい国がありますが、例えば去年のカナダにおける森林火災を見てわかるように、先進国と言われるアメリカとかカナダでも影響が出ていますので、国際社会全体が取り組む必要があります。

例えば公害問題は、汚染者負担原則ということで、汚染を出した人が最大の努力をし責任を取るということが原則だったわけですので、気候変動問題でも、その原因を作っている国や企業が責任を取って努力する必要があると思います。

それから、被害を受けている貧しい国や被害を受けている層に対する支援を強めることも必要です。そういう意味で、昨年の COP28 では、被害を受けている人に対する損失と損害のファンド、そして支援する基金ができましたので、基金をだせる国、日本も含めて、お金やあるいは技術を提供し、協力していく必要があると思います。

先ほどのプラネタリー・バウンダリーについて、ちょっと補足しますと、資料のグラフをもう一回、見ていただきたいですが、いくつかの指標の中で改善しているものが一つだけあります。それはオゾン層の破

壊です。かつてオゾン層破壊がかなり社会的に注目されましたが、実は最近改善し、オゾン層は徐々に回復しています。

理由は非常にシンプルで、オゾン層を破壊する原因物質であるフロンとかハロンといった原因となる物質の製造・使用を禁止したのです。

そうすると、徐々に回復しているのです。ですから気候変動対策もわりと明確で、石油・石炭・天然ガスといった原因物質を減らす、あるいはなくすことです。

すぐに全部は難しいかと思われるかもしれませんが、いろんな技術があるのです。技術を広げていくことで、まずは原因を減らすということが大事です。

それから廃棄物ですが、ハニィさんもインドネシアで努力されて、プラスチックも一度海や川に出てしまってから、回収するのは大変ですから、本来は分解できる製造に関する対策をきちんと取るべきだというのが私の考えです。以上です。ありがとうございました。

進行：松下先生、どうもありがとうございました。会場からの質問です。どちらも“幸福”に関する質問です。

GNH について、ブータン政府と今の住民のあいだに何か乖離がありますか？例えば私たちが言っているように幸福だと言うほど、ブータン人はその幸福度を重視してないのではないかという質問です。松下先生、お願いします。

松下：今日はブータンの良いところだけ紹介しましたが、実は経済的にもいろいろ大変な国であります。特にコロナで、ブータンは大変厳しい状況に陥っています。国の経済の相当部分が観光に依存しており、コロナ禍によって海外から観光に来る人が減ってしまい、ブータン経済は非常に厳しい状況に置かれています。しかし、そういう状況ではありますが、ブータン政府は依然として、環境に配慮したエコ・ツーリズムやサステナブル・ツーリズムとして、人数を制限し、一定の場所を自然を壊さずに観光するという政策をとっています。ブータン政府は、ブータンに入ってくる人に対して、一種の入国税といいますか観光税をかけて国家の収入としているというのが特徴です。

そしてブータンは、教育が無償化され、大学を出る人も増えたのですが大学教育にふさわしいと考える仕事がなかなかないということで、若い人の失業率が大変高くなっています。

教育を受けた人が、生きがいを持って働ける仕事を国内でどうやってつくるかというのが課題です。

今、多くの若い人はオーストラリア、カナダに移住する人が増えているそうです。英語で教育をしていますから、不自由なく海外に出ることができます。

国によってそれぞれ幸福を追求する状況に違いがあるわけですが、できるだけ民主的に議論をし、その国ごとに解決策を導いていくことが必要だと思います。

進行：松下先生、ありがとうございました。最後に、ユースの立場で発表された森さんとハニィさんに、一言メッセージをお願いします。森さんからお願いします。

森：今日は皆さま、お足元が悪い中、お越しいただきましてありがとうございます。

NPO の北九州ビオトープネットワーク研究会と、ハニィさんの所属する NPO ノルサンパでは、コロナで一度

プロジェクトは止まってしまいましたが、また協力し、もっともっと良くなるように頑張っていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ハニィ：女性は、あらゆることに対し非常に重要な役割を担っています。女性は弱くてはいけないし、よりいい方向に向かうべきで、とどまってはいけないのです。女性の手の中には、とてつもない力があり、世界の女性の皆さんや私たちが全てを変えることができることも可能であると信じています。

環境のことですが、私たちは地球を孫のために借りているのです。私たちは、良い環境を孫に返さないといけません。だから環境問題に取り組まないといけないのです。ありがとうございます。

進行：松下先生、森さん、ハニィさん、大変タイトな時間設定の中で、とても重要で大切なお話をたくさんしていただきました。ありがとうございました。

第 34 回アジア女性会議ー北九州

『危機の時代を生きる』

２部／コンサート「ウクライナ～平和へのアプローチ」

日時　2024 年 1 月 20 日（土）15：50-16：30
会場：会場視聴（北九州市立男女共同参画センター・ムーブ２階）
言語：日本語、手話、要約筆記

プログラム

<コンサート>
15:30-15:35
■バンドゥーラ奏者　Kateryna（カテリーナ）
ウクライナの伝統楽器バンドゥーラ奏者・歌手

進行：ただ今から、第 34 回アジア女性会議ー北九州「危機の時代を生きる」第 2 部のコンサートを開演い

たします。

第 1 部の「環境問題」という危機に続き、第 2 部では今まさに現在起こっている「戦争・紛争」という危機に対する平和の祈りを取り上げます。

ウクライナの伝統楽器「バンドゥーラ」奏者であり、歌手のカテリーナさんについてご紹介いたします。

カテリーナさんは 6 歳でウクライナの音楽団に入団し、19 歳で活動拠点を東京に移されました。現在、祖国ウクライナと日本の架け橋となり、平和への調べを届け続けておられます。

それでは、カテリーナさん、よろしくお願いいたします。

バンドゥーラの演奏と歌 ：『母への道』

カテリーナ：皆さま、こんにちは。カテリーナです。私は 18 年前にウクライナ・キーウから来ました。現在、日本全国で、この大きくて珍しい楽器を使って音楽活動をしています。

本日はたくさんの方に来ていただき、本当にありがとうございます。心を込めて、歌をお届けしたいと思います。短い時間ですけれど最後までお楽しみください。

今聴いていただいたのは、ウクライナの曲で『母への道』という歌です。

「自分の国から離れても、ずっと、好きで心の中で大切にしながら生きてほしい。もちろん、新しい国にいても、新しい国のことも自分の国のように好きになって、大切にしながら生きてほしい」とママに教えてもらいました。

ロシアの侵攻によりウクライナで戦争が始まってから、残念ながら来月で 2 年になります。この 2 年間、毎日「ウクライナ戦争」「ウクライナ支援」「ウクライナチャリティー」という言葉で世界中の皆さんが疲れてきました。

しかし、残念ながらウクライナでは、いまだに戦争が落ち着いていません。いまだに戦争が終わっていません。

戦争が始まってからおととしの 3 月に、ウクライナから私のママが日本に避難してきました。しかし、まだウクライナに、私の上の 2 人の姉、姉の子どもたち、他にも親戚やたくさんの友達が残っています。

現在、私の 2 人のいとこたちと何人かの親友たちが戦地で戦っています。毎日心配です。

昨日も、おとといも、その前の日も、ロシア側がウクライナ全国にミサイルを落とし、誰にも何にも悪いことをしていない小さな子どもたち、生まれたばかりの赤ちゃんたち、お年寄りの人たち、動物たち、みんなが毎日殺されています。

この、大きくて珍しい楽器を使って私が日本全国で活動を始めたのは、ウクライナで戦争が始まってからではなく、この活動を始めてもう 16 年になります。

日本全国を回って、ウクライナ文化・伝統・民俗・歴史、そして今のウクライナの現状を、音楽を通して紹介しています。

では、次の曲をお届けしたいと思います。次の曲はウクライナの曲で『ウクライナ』。どうぞお聴きください。

バンドゥーラの演奏と歌 ：『ウクライナ』『ハナミズキ』

カテリーナ：ありがとうございます。『ハナミズキ』という曲をお届けしました。

ここで、この大きくて珍しい楽器の紹介をしたいと思います。

本日、この楽器と私の演奏が初めての方、何人くらい、いますか？ あら、ほとんどですね。はい、ありがとうございます。

この楽器は「バンドゥーラ」というウクライナの民族楽器です。弦の数は、とてもたくさんに見えますよね。なんと、65 本もあります。

とても軽そうに見えますが、なんと、8 キロもあります。ケースに入れたら、大体 10 キロのお米袋とほぼ同じ重さになります。毎日こうやって持つと、ジムに行かなくても筋トレにすごくいいです（笑）。

このバンドゥーラは、ウクライナでは 12 世紀の頃からウクライナの民族楽器として知られています。昔、ウクライナで目の不自由な男性の方が演奏した楽器です。日本でいうと「琵琶」みたいな感じといわれています。

昔のバンドゥーラはもっと小さかったです。当時は「バンドゥーラ」ではなく「コブザ」という名前が付いていました。コザック時代の時に、コザックたちが小さなバンドゥーラ、コブザを背中に背負って、馬に乗って旅しながらウクライナ文化・伝統・民俗・歴史を伝える活動をしていました。

当時は弾き方も、こうやって体の前に置いて、アコルド（注／accordo 和音）を出しながら、語りとして使われた楽器です。それが、日本の琵琶に似ているのではないかと言われています。

少しずつ少しずつ大きくなって、少しずつ重くなって、そして少しずつ弦の数が増えてきて、実は現在、爪で弾く弦楽器の中で一番弦が多い楽器といわれています。

形は、ギターやハープに似ていると言われますけれども、一番近い楽器は、なんと“ピアノ”になります。イメージとしては、ピアノの白黒の鍵盤が弦になっているだけです。

これだけ弦はたくさんありますが、一本一本、自分の長さ・自分の太さ・自分の音が決まっています。押さえる弦は一つもありません。左手も一本ずつ、爪で弾いています。

とても珍しい楽器ではありますが、現在、日本全国で弾いている奏者は、今のところはなんと、2 人しかいないんです。そのもう一人は私の姉です。ぜひ今後ともよろしくお願いいたします。

バンドゥーラの演奏と歌 ：『涙（なだ）そうそう』

カテリーナ：ありがとうございます。『涙（なだ）そうそう』という曲をお届けしました。

では、とても残念ですけれども、最後の曲の時間になってきました。

日本全国でコンサート活動をして、いろんな所でも CD や本を販売しておりますが、戦争が始まってからは、大使館や、いろんな団体を通して、もしくは直接売り上げの一部をウクライナへ送っています。もちろんこれからも、引き続き行います。そして、今年 1 月 1 日に北陸で大きな地震がありました。

私は活動の中で、富山県、石川県、日本全国回っています。そこでも、たくさんの方々を知っていますので、北陸のほうにも自分の物販の売り上げの一部を送っています。

最後の曲は、私にとっては特に大好きな曲です。子どもの頃、私には夢がありました。

10 歳の時初めて日本に来た時、いつか、この平和で安全な国で、ソロ活動ができたらいいな、という夢を持つようになりました。

その夢に向かって、途中いろいろ大変で、諦める時もありました。何とか、ここまで来られて、今、日本全国でソロ活動ができるようになりました。一年間で 300 公演を超える中、日本全国を飛び回っています。

もちろん、日本全国の皆さんのおかげです。本当にありがとうございます。

どんなに時間をかけても、どんなに時間がかかっても、願いは必ずかなうと信じています。

今、私には、また新しい夢があります。それは早く、戦争が終わってほしいです。これ以上、どの国でも戦争が起きないように、戦争なし、震災なし、ずっと自由で、ずっと安全で、ずっと平和で、ずっと青い空でありますように。

バンドゥーラの演奏と歌 ：『翼をください』

カテリーナ：ありがとうございました。

（観客からアンコールの拍手）

ありがとうございます。では、もう一曲お届けします。

私は、これからもずっと、何があっても、ウクライナは大好きで、私にとっては、ウクライナは第一のふるさとですけれども、日本も、これからもずっと、何があっても大好きで、私にとって、日本は第二のふるさとになっています。最後に皆さんと一緒に『故郷（ふるさと）』を歌いたいと思います。

バンドゥーラの演奏と歌 ：『故郷（ふるさと）』

カテリーナ：ありがとうございました。

第 34 回アジア女性会議―北九州
報告書

発行　（公財）アジア女性交流・研究フォーラム
〒803-0814
北九州市小倉北区大手町 11-4
TEL （093）583-3434
FAX （093）583-5195
URL http://www.kfaw.or.jp

発行月　令和６年３月